

コミュニケーション・ストラテジーを活用したコミュニケーション能力の向上
ー生徒同士による効果的なインタラクションの研究ー

千葉県立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇 (英語)

1 研究の背景と目的

学習指導要領(2009)の総則においては、「生徒の言語活動の充実」、また、外国語においては「授業を実際のコミュニケーションの場とする」ことが謳われ、「コミュニケーション英語Ⅰ」が必修科目となった。そして、できるだけ多くのコミュニケーション活動を授業内で行うためには、教師と生徒のインタラクションを中心とした授業だけでなく、生徒同士のインタラクションを中心とした授業を行うことが必要である。

しかし、生徒同士でインタラクションを行う際にコミュニケーションの障害になるのは、それぞれの生徒が運用できる語彙力や表現力の差である。ペアでコミュニケーション活動を行う場合、英語運用力の高い生徒の発話をその力の低い生徒が1回で理解することは困難であり、このことで双方向のやりとりが成立しなくなる場合が多い。

また、学習指導要領の中では、コミュニケーションを円滑にするものとして、「聞き直す」「繰り返す」「言い換える」「話題を発展させる」等が挙げられ、サンドラ・サヴィニョン(2009)も、コミュニケーション能力の要素として①文法的能力、②談話能力、③社会言語能力、④方略的言語能力を挙げている。その中で方略的言語能力とは、コミュニケーションを成り立たせるためのさまざまな戦略であり、“Strategic competence is present at all levels of proficiency although its importance in relation to the other components diminishes as knowledge of grammatical, sociolinguistic, and discourse rules increases.”とあるように、どの学習者のレベルにも適応するとしている。つまり、英語運用能力に違いのある生徒同士のコミュニケーション活動にも有効であると考えられる。

また、語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格である Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (2001)においては、「聞く」「書く」「話す」「読む」の4技能ではなく、「理解する」(「聞く」と「読む」)「話す」(「やりとり」と「表現」)「書く」の5技能としている。「話す」の中に「やりとり」が含まれているのは、「話す」能力が一方方向だけではなく、相手とのコミュニケーションにおいてどのように機能するかが重要であるためである。

授業においても、生徒同士がペアワークでコミュニケーションを成立させるためには、2人の英語運用能力のギャップを埋めることが必要である。つまり、英語運用能力の低い生徒が話者の発話を理解できないときに、以下のような様々なコミュニケーション・ストラテジー(以下CS)を用いて情報のやりとりを行うことが効果的であると考えられる。

- (1)理解できないことを相手に伝える。
- (2)話すスピードを遅くしてもらうことを頼む。
- (3)理解できなかった部分の繰り返しを頼む。
- (4)例を挙げて説明を求める。

(5)簡単な語彙・表現で言い換えを頼む。

(6)相手が言ったであろう内容を推測し、自分の語彙で説明し、内容の確認を行う。

しかも、上記のような CS を使用することで、英語運用能力の低い生徒は自分の英語運用能力に劣等感を持たず、自ら発話することによってコミュニケーション活動のイニシアチブを握り、ペアワークをむしろ活発にすることが可能になる。また、上記(6)は、オーラル・サマリーにつながる活動であり、非常に有効なものと考えられる。

また、英語運用能力が高い生徒にとっても、ペアから上記(4)や(5)を求められることによって、即興的な発話力を向上させ、相手を意識した使用語彙や表現を選択する能力を育成することにつながるなど、英語によるコミュニケーション能力の向上に関する効果は高いと考えられる。

2 研究仮説

本研究では、コミュニケーション能力の向上を目指す学校設定科目「コミュニケーション基礎」において、第1学年を対象にペアワークを中心とした言語活動を行う。以下が本研究の仮説である。

仮説1 CS を使用すれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が向上し、言語活動が活性化するのであろう。

仮説2 CS を使用すれば、コミュニケーションを通じて情報や考えを理解する能力が向上するのであろう。

3 研究方法と内容

3.1 文献研究

(1)CS に関する文献研究

(2)生徒同士のコミュニケーション活動に関する文献研究

3.2 授業実践

CS の提示及びペアワークを使用した CS の使用

3.3 仮説の検証方法

3.3.1 プレテスト及びポストテストの実施

(1)やりとりによるリスニング力の変化

(2)セルフチェックによる CS 使用状況の変化

3.3.2 ペアワークの言語活動の時間の変化の調査

3.3.3 アンケートによる意識の変化の調査

3.4 研究内容

本研究では、英語運用力に差のある生徒同士が、CS を用いることにより、お互いにとって効果的な言語活動につながるのかを検証する。そのため、次の2点の研究を行う。

(1)研究対象 40 名が、CS を利用した活動を通して、言語活動が活性化するかどうかの研究を行う。

(2)研究対象 40 名をリスニングのプレテストの結果により、上位 3 分の 1 を A 群、中位 3 分の 1 を B 群、下位 3 分の 1 を C 群とし、それぞれの層のやりとりによるリスニング能力、使用できる CS がどのように変容するのかなどを研究を行う。

4 研究計画

4.1 対象生徒

国際コミュニケーション科 1 年生 1 クラス 20 名（1 クラス 2 展開の少人数授業）

普通科 1 年生 1 クラス 20 名（1 クラス 2 展開の少人数授業）

4.2 科目及び教科書

「コミュニケーション基礎」（コミュニケーションに特化した学校設定科目） 2 単位

MAINSTREAM ENGLISH EXPRESSION I（増進堂）

4.3 研究計画

段階	研究の内容	対象生徒	科目
第 1 段階 平成 24 年 6 月 ～24 年 11 月	文献研究 生徒の実態把握 研究内容の検討	普通科 2 年生 2 クラス（80 名）	コミュニケーション活 動 I（学校設定科目）
第 2 段階 （試行実施） 平成 24 年 11 月 ～25 年 3 月	ワークシート作成 研究内容の検討 ①授業で扱う CS の検討 ②ペアワークの検討 評価方法の検討	普通科 2 年生 2 クラス（80 名） 普通科 3 年生 1 クラス（20 名）	コミュニケーション活 動 I（学校設定科目） コミュニケーション活 動 II（学校設定科目）
第 3 段階 （本実施） 平成 25 年 4 月 ～25 年 10 月	プレテスト 実践 ポストテスト 分析 検証	普通科 1 年生 1 クラス（20 名） 国際コミュニケー ション科 1 年生 1 クラス（20 名）	コミュニケーション基 礎（学校設定科目）

5 研究実践

5.1 プレテストの実施

5.1.1 実験前の能力の測定

教師が英語検定 3 級レベルの以下の文章を、ナチュラルなスピードで 2 回読み、生徒はメモを取りながら聞く。その後、教師が内容に関する質疑を 5 問行い、生徒が解答する。最後に生徒はオーラル・サマリーを行う。Q1～Q5 は内容がすべて理解できていれば 2 点、一部理解できていない場合は 1 点、理解できていない場合は 0 点とし、Q6 は内容がほぼ理解できていれば 4 点、概要が理解できていれば 3 点、概要が理解できていない場合は 2 点、理解できていない箇所が多い場合は 1 点、まったく理解できていない場合及び無回答は 0 点とした。

<スクリプト>

Here's tomorrow's world weather. San Francisco will be cool and windy, with a high of 15 and a low of 10. London will be hot and dry, with a high of 25 and a low of 18. Tokyo will be sunny and comfortable, with a high of 22 and a low of 15. Paris will get some rain, with a high of 22 and a low of 11.

<質問>

- Q1 How many cities did I talk about?
- Q2 What will the high temperature be in San Francisco?
- Q3 How will the weather be in London?
- Q4 What did I say "Tokyo will be sunny and"?
- Q5 What will the low temperature be in Paris?
- Q6 Summarize what I said.

5.1.2 プレテストの結果及び考察

【表1】平均点

	問1	問2	問3	問4	問5	オーラルサマリー	合計
平均点	1.7点	1.6点	0.4点	0.3点	1.5点	1.6点	7.0点

問3及び問4の正答率が低かった。問3ではリエゾンが起こる hot and dry が聞き取れていないこと、問4では comfortable という単語が未知語であったことがその理由であると考えられる。多くの情報があり、前後関係から類推できる場合は別として、聞き返しのできないこのような状況においては、知識があるかどうかの内容把握のポイントとなっていると考えられる。

また、習熟度によるそれぞれの推移を観察するため、対象生徒40名を合計点により3分割し、上位より順にA群(14名)、B群(13名)、C群(13名)とした。以下はそれぞれの群の平均点である。C群については、比較的簡単な問1や問2の正答率も低く、概要の把握ができていない生徒が多いと思われる。

【表2】A群、B群、C群別平均点

	問1	問2	問3	問4	問5	オーラルサマリー	合計
A群	2.0点	2.0点	0.6点	0.7点	2.0点	2.8点	10.1点
B群	2.0点	1.8点	0.1点	0.0点	1.4点	1.5点	6.8点
C群	0.9点	0.9点	0.5点	0.0点	0.9点	0.5点	3.7点

5.2 CSの使用状況調査の実施

5.2.1 CS使用状況に関するセルフチェックの実施

英語の話者の話す内容が理解できないとき、次の(0)~(6)の方策をどのくらい用いますか。それぞれア~エのうちから、選んでください。

ア よく行う イ 時々行う ウ ほとんど行わない エ まったく行わない

- (0)前後関係から理解しようとする。
- (1)理解できないことを相手に伝える。
- (2)ゆっくり話すように相手に頼む。
- (3)わからない語句等について繰り返してもらおうように相手に頼む。
- (4)具体的な例を挙げてもらおうように相手に頼む。

(5)簡単な語彙で話してもらうように相手に頼む。

(6)相手が言ったであろう内容を、自分の語彙や表現で話し、相手に確認する。

5.2.2 結果及び考察

【表3】CS 使用状況の全体及び A 群, B 群, C 群別平均

		よく行う			時々行う			ほとんど行わない			まったく行わない		
前後関係から理解する	平均	55%			30%			8%			8%		
	A B C	57%	67%	46%	43%	33%	15%	0%	8%	15%	0%	0%	23%
理解できないと伝える	平均	38%			35%			25%			3%		
	A B C	21%	67%	31%	43%	25%	38%	29%	17%	31%	21%	0%	0%
ゆっくり言ってもらおう	平均	18%			45%			23%			15%		
	A B C	7%	25%	23%	43%	50%	46%	29%	25%	15%	21%	8%	15%
繰り返してもらおう	平均	30%			38%			25%			8%		
	A B C	21%	42%	31%	43%	42%	31%	36%	17%	23%	0%	8%	15%
具体例を挙げてもらおう	平均	13%			28%			35%			25%		
	A B C	21%	17%	0%	43%	25%	15%	21%	42%	46%	14%	25%	38%
簡単な語にしてもらおう	平均	10%			23%			50%			18%		
	A B C	14%	8%	8%	21%	17%	31%	43%	67%	46%	21%	17%	15%
自分の語彙で確認する	平均	13%			33%			33%			22%		
	A B C	14%	8%	15%	50%	25%	23%	29%	50%	23%	7%	25%	38%

CS は、「前後関係から理解しようとする」が最も簡単だと考え、難易度順だと思われる順に並べた。「繰り返してもらおう」までは「よく行う」「時々行う」の合計の平均値が 50%を超えているが、「具体例を挙げてもらおう」以降はその値が 50%以下となり、ほぼ予想通りの結果となった。C 群の生徒は、「具体的な例を挙げてもらおう」「簡単な語にしてもらおう」「自分の語彙で確認する」が苦手である。また、C 群の生徒は「前後関係から理解する」において、「ほとんど行わない」が 15%、「まったく行わない」が 23%もあり、理解できないときに前後関係から類推せずに諦めてしまっている傾向がある。

5.3 本実施

5.3.1 ペアワークによる CS の実践 1

①生徒にコミュニケーション・ストラテジーを提示し、読みの練習を行う。

使用するコミュニケーション・ストラテジー

- (1) 理解ができないことを伝える表現
(例) Sorry, I don't understand.
- (2) ゆっくり話すことを求める表現
(例) Could you speak more slowly, please?
- (3) 繰り返しを求める表現
(例) Could you say that again, please?
- (4) 具体例を挙げて説明を求める表現

(例) Could you tell me some examples, please?

(5) 使用する英語を簡単な語彙や表現にすることを求める表現

(例) Could you use easy English?

(6) 相手が言ったであろう内容を推測し、確認する表現

(例) You mean ...?

②生徒はペアを作り、生徒 A には第 1 回のカードを、生徒 B にはメモ用紙を配付する。生徒 A はカードを読み、生徒 B はメモを取りながら概要を理解する。その際、概要を理解する事が目的であるため、ディクテーションは行わないこととする。生徒 B は、生徒 A の話した内容が理解できないときには、CS を使用し、コミュニケーション活動を通して情報を理解する。また、使用した CS の数を数える。終了後、生徒 B に第 2 回のカードを配付し、役割を交代して同様の活動を行う。カードは英検 3 級～準 2 級レベルで 60～90 語程度のものである 4 種類を作成し、合計 4 回行う。

<配付するカード>

・第 1 回

Thank you for coming. Attention, shoppers. We are having a closing down sale now. This is your chance to get big discounts from the list price. Not only are all pieces of furniture marked down 10 % to 20%, but the desks are all 50 % down and the chairs and sofas are all 30% off. Don't miss the chance. We look forward to your shopping with us again.

・第 2 回

Well, everyone. Here is the bus station. If you want to go to the zoo, take bus #50. It will take about 8 minutes to get there. If you want to go to the museum, take bus #13. It will take about 15 minutes. And if you want to go to the National Park, you can take bus #15 and get off at the fifth stop. It will take about 20 minutes. You have some time to look around here, so please come back here at 6:00 p.m. Have fun!

・第 3 回

Hello and thank you for shopping at Good Day Market today. It is now 8:55 p.m., and we will be closing in about 5 minutes. We are open Monday through Thursday from 9:30 a.m. to 9:00 p.m., and on Saturday from 10:00 a.m. to 8:00 p.m. On Sundays, we are closed all day. Once again, thank you for shopping with us today. It's now a few minutes to 9:00 p.m., so it will very soon be closing time.

・第 4 回

Thank you for coming. We're having a giant bike clearance sale this weekend. All last year's models will go before closing time on Sunday. You can get 50 % off. Don't miss this chance of a lifetime to buy some of last year's greatest bikes. We are open from 9:00 to 8:00 every day, but we are closed on Fridays. During the sale, we are open 30 minutes before our regular opening time. Hurry up and find your favorite bike.

5.3.2 ペアワークによる CS の実践 2

- ①ペアを作り、それぞれが“My favorite place”についてブレインストーミングを行い、生徒各自が辞書で語彙の確認を行う。
- ②“My favorite place”について、「どこか」「なぜか」「どんな思い出があるか」等を考えさせ、キーワード等のアウトラインをメモとして書かせる。
- ③ペアを作り、生徒 A は“My favorite place”について 2 分程度話し、生徒 B はメモをとりながら聞く。ただし、メモは概要を理解することを目的とするため、キーワードのみ記入することとし、ディクテーションは行わない。生徒 B は理解できないことがあれば、CS を使用し、内容の確認を行う。
- ④③終了後、生徒 B はメモを見ながら、概要を再生する。生徒 A はその内容に間違いがあれば、訂正する。
- ⑤生徒 A と生徒 B が役割を交換し、②～④を行う。
- ⑥ペアを変え、③～⑤の活動を 10 人と行う。

6 検証

以下を行い、仮説を検証した。

6.1 仮説 1 に関する検証

6.1.1 コミュニケーションを図ろうとする態度の向上に関する検証

5.2.1 の CS 使用状況に関するセルフチェックを再度行い、変容を検証する。

【表 4】CS 使用状況の全体及び A 群、B 群、C 群別平均〔() 内の数字と矢印は実験前との比較〕

		よく行う			時々行う			ほとんど行わない			まったく行わない		
前後関係から理解する	平均	63% (↑8%)			28% (↓2%)			10% (↑2%)			0% (↓8%)		
	A B C	57%	62%	69%	36%	31%	15%	7%	8%	15%	0%	0%	0%
理解できないと伝える	平均	40% (↑2%)			50% (↑15%)			10% (↓15%)			0% (↓3%)		
	A B C	36%	38%	46%	64%	62%	23%	0%	0%	31%	0%	0%	0%
ゆっくり言ってもらおう	平均	40% (↑22%)			45% (→)			13% (↓10%)			3% (↓12%)		
	A B C	36%	31%	54%	43%	54%	38%	21%	8%	8%	0%	8%	0%
繰り返してもらおう	平均	45% (↑15%)			45% (↑7%)			8% (↓17%)			3% (↓5%)		
	A B C	43%	62%	31%	50%	31%	54%	7%	0%	15%	0%	8%	0%
具体例を挙げてもらおう	平均	25% (↑12%)			48% (↑20%)			15% (↓20%)			13% (↓12%)		
	A B C	29%	31%	15%	43%	54%	46%	21%	8%	15%	7%	8%	23%
簡単な語にってもらおう	平均	30% (↑20%)			53% (↑30%)			15% (↓35%)			3% (↓15%)		
	A B C	43%	8%	38%	57%	62%	38%	0%	23%	23%	0%	8%	0%
自分の語彙で確認する	平均	18% (↑5%)			38% (↑5%)			35% (↑2%)			10% (↓12%)		
	A B C	36%	8%	8%	50%	31%	31%	14%	54%	38%	0%	8%	23%

CS の使用率を実験前後で比較すると、A 群、B 群、C 群のすべての層で、CS の使用率は増加しており、コミュニケーションを図ろうとする態度が向上したと考えられる。

特に、C 群において、「前後関係から理解しようとする」を「まったく行わない」が、実験前では 23%いたのに対し、実験後は 0%となった。これは、他の CS を使用することによって、理解できない語彙や表現をそのままにせず、わからないものを類推しようとし始めており、英語が苦手な生徒の積極的に学ぼうという関心・意欲が大きく向上したと考えられる。この内在的な変化は、生徒の活動する様子からは伺い知ることはできず、非常に驚くべき結果となった。

また、A 群、B 群、C 群のすべてにおいて、変化が大きく、使用できるようになった CS は、「簡単な語彙で話してもらうように頼む」「具体例を挙げてもらうように頼む」であった。コミュニケーションにおいて相手の使用した語彙や表現が理解できないときには、「ゆっくり話してもらう」や「繰り返してもらう」では解決できず、「簡単な語彙で話してもらう」「具体例を挙げてもらう」ことが最も効果的であると生徒が考え、使用したためだと考えられる。

6.1.2 言語活動の活性化に関する検証

【表 5】 5.3.1 ペアによる CS の実践 1 におけるペアワークの言語活動の時間の変化

	平均時間	最長時間	最短時間
第 1 回	259 秒	307 秒	174 秒
第 2 回	329 秒	387 秒	284 秒
第 3 回	299 秒	366 秒	252 秒
第 4 回	318 秒	388 秒	257 秒

言語活動の平均時間は、第 2 回以降横ばいであり、回を追うごとに増加とはならなかった。理由として考えられることは、第 1 回～第 4 回のカードに書かれたスクリプトの語彙数や難易度等に多少の差があったことと、回を追うごとに活動に慣れ、スムーズに活動できるようになったことが挙げられる。それでも、第 2 回以降は、60～90 語のスクリプトによって、生徒同士で 5 分程度のコミュニケーション活動を行っていることになり、非常に活発な言語活動が行われていた。

【表 6】 5.3.1 ペアによる CS の実践 1 におけるペアワークの CS の使用率（使用者／人数）

		理解できないと伝える	ゆっくり言ってもらう	繰り返してもらおう	具体例を挙げてもらおう	簡単な語にしてみよう	自分の語彙で確認する	平均
第 1 回	平均	50%	30%	80%	25%	25%	65%	46%
	A 群	20%	0%	100%	0%	40%	60%	37%
	B 群	63%	38%	75%	38%	13%	63%	48%
	C 群	57%	43%	71%	29%	29%	71%	50%
第 2 回	平均	65%	60%	80%	45%	35%	65%	58%
	A 群	78%	67%	89%	33%	44%	56%	61%
	B 群	40%	20%	40%	60%	20%	80%	43%
	C 群	67%	83%	100%	50%	33%	67%	67%

第3回	平均	25%	50%	80%	10%	25%	35%	38%
	A群	0%	33%	83%	17%	17%	33%	31%
	B群	14%	57%	86%	0%	0%	29%	31%
	C群	57%	57%	71%	14%	57%	43%	43%
第4回	平均	40%	65%	80%	20%	15%	40%	43%
	A群	25%	88%	75%	13%	25%	50%	46%
	B群	33%	50%	83%	17%	0%	33%	36%
	C群	67%	50%	83%	33%	17%	33%	47%

特筆すべきは、第1回～第4回のすべてにおいて、C群の生徒がA群及びB群の生徒に比べ、最も多くCSを使用している点である。つまり、英語が苦手な生徒が、より多くのコミュニケーション活動を行っているのである。また、状況に応じて使用するCSが異なるためにカードの内容によって使用したCSは異なっているが、概して、すべての群の生徒が最もよく使うCSは、「ゆっくり話すように相手に頼む」である。まず、聞き返し、その後必要に応じて他のCSを使う姿が多く見られた。また、内容が若干難しい第3回と第4回については、「自分が理解できないことを相手に伝える」がA群やB群に比べ、C群が非常に多かった。内容が難しい場合、C群の生徒は、まず、自分が理解できないことを相手に伝え、相手にゆっくり話してもらうことで概要を理解するパターンが多かった。

6.2 仮説2に関する検証（ポストテスト）

6.2.1 情報や考えを理解する能力の変化

5.1.1 で行った実験前の能力と実験後の能力の検証

スクリプトを以下のものに変更し、5.1.1と同様の検証を行った。

<スクリプト>

Here's tomorrow's world weather. New York will be cool and cloudy, with a high of 14 and a low of 8. Sydney will be hot and dry, with a high of 28 and a low of 26. Rome will be sunny and humid, with a high of 30 and a low of 23. Osaka will be rainy, with a high of 15 and a low of 10.

<質問>

- Q1 How many cities did I talk about?
- Q2 What will the high temperature be in New York?
- Q3 How will the weather be in Sydney?
- Q4 What did I say "Rome will be sunny and"?
- Q5 What will the low temperature be in Osaka?
- Q6 Summarize what I said.

【表7】正答率及び平均CS使用数【使用数/人数】（ ）内の矢印と数字は実験前との比較

	問1	問2	問3	問4	問5	オールサマリ-	合計	平均CS 使用数
平均	1.8点 (↑0.1)	2.0点 (↑0.4)	1.4点 (↑1.0)	0.9点 (↑0.6)	1.7点 (↑0.2)	2.4点 (↑0.8)	10.2点 (↑3.2)	3.7回

A 群	2.0 点 (→)	2.0 点 (→)	1.8 点 (↑1.2)	1.6 点 (↑0.9)	2.0 点 (→)	3.5 点 (↑0.7)	12.9 点 (↑2.8)	4.0 回
B 群	2.0 点 (→)	2.0 点 (↑0.2)	1.6 点 (↑1.5)	0.6 点 (↑0.6)	1.7 点 (↑0.3)	1.7 点 (↑0.2)	10.1 点 (↑3.3)	3.3 回
C 群	1.4 点 (↑0.5)	1.8 点 (↑0.9)	0.8 点 (↑0.3)	0.5 点 (↑0.5)	1.4 点 (↑0.5)	1.4 点 (↑0.9)	7.4 点 (↑3.7)	3.7 回

問1～問5及びオーラル・サマリーにおいて、平均点が上昇した。実験前はリエゾンが起こる問3及び未知語が含まれている問4の正答率が低かったため、今回も、問3で hot and dry というリエゾン、問4では humid という未知語を入れたが、実験後は正答率が大幅に上昇した。また、生徒が使用した CS 数を集計し、人数で割った平均 CS 使用数も算出した。こちらは A 群が1人平均 4.0 回と最も CS を利用した。また、A 群の生徒で目立ったのは、こちらが提示した CS だけでなく、“How will the weather be in New York?” や “Please tell me the high temperature in Osaka again.” など、その場に応じた直接的な CS でやり取りを行う生徒が出てきた。また、内容理解の確認のために自らオーラル・サマリーを行い、正しく内容が理解できているかを教師に確認する生徒もいた。B 群の生徒については、合計の平均値が A 群とほぼ同じになるまで上昇する結果となった。

6.3 生徒アンケートによる意識の変化

生徒に以下のアンケートを行った。

次の1～6について、コミュニケーション・ストラテジーを使用したことにより、どのように変化したかを、それぞれア～エのうちから選んでください。

ア とてもそう思う イ そう思う ウ あまりそう思わない エ そう思わない

- ①相手の話した内容を理解できるようになった。
- ②コミュニケーション活動に積極的に参加できた。
- ③英語を話せるようになりたいと思うようになった。
- ④自分の考えを相手に伝える方法がわかった。
- ⑤楽しかった。
- ⑥自分の英語力が上がった。

【表8】アンケート結果

				とてもそう思う			そう思う			あまりそう思わない			そう思わない		
	平均														
理解できるようになった	平均	53%			43%			5%			0%				
	A B C	71%	54%	31%	29%	36%	62%	0%	8%	8%	0%	0%	0%		
積極的に参加した	平均	50%			45%			5%			0%				
	A B C	64%	31%	54%	36%	62%	38%	0%	8%	8%	0%	0%	0%		
話せるようになりたいと思った	平均	60%			28%			13%			0%				
	A B C	79%	54%	46%	21%	31%	31%	0%	15%	23%	0%	0%	0%		
考えを伝える方法がわかった	平均	43%			45%			10%			3%				
	A B C	57%	31%	38%	43%	46%	46%	0%	23%	8%	0%	0%	8%		

楽しかった	平均			53%			38%			10%			0%		
	A	B	C	71%	46%	38%	21%	46%	46%	7%	8%	15%	0%	0%	0%
英語力が上がった	平均			30%			55%			15%			0%		
	A	B	C	36%	38%	15%	64%	38%	62%	0%	23%	23%	0%	0%	0%

平均値を見るとすべてにおいて、「とてもそう思う」「そう思う」の合計が 85%を超えており、生徒は CS を使用することで英語によるコミュニケーション能力が向上することを実感し、また意欲も上昇したと考えられる。しかし、A 群に比べ、B 群及び C 群の生徒たちは「自分の考えを相手に伝える方法がわかった」及び「自分の英語力が上がった」について、「あまりそう思わない」「そう思わない」が多かった。生徒同士のコミュニケーション活動の中で、C 群の生徒は、相手の生徒から「具体的な例を挙げての説明や使用する英語を簡単な表現にすることを求められる」CS に対して、しっかりと答えられないケースが見受けられた。

7 結論

以上の研究により、以下のように結論づける。

仮説 1 CS を使用すれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が向上し、言語活動が活性化する。

仮説 2 CS を使用すれば、コミュニケーションを通じて情報や考えを理解する能力が向上する。

生徒同士のインタラクションを中心とした授業を活性化させるためには、生徒自身が CS の必要性、必然性を感じ、自発的に使用することが重要である。そのためには、情報や考えのギャップを埋めるペアワークと CS を使用しやすい雰囲気作りが効果的である。

本研究をとおして、A 群、B 群、C 群のすべての生徒に、コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度と情報や考えを理解する能力の向上が見られた。その中でも、特に英語を苦手とする C 群の生徒に顕著な向上傾向が見られた。CS を用いることによって、C 群の生徒は生き生きと活動し、ペアワークを含め、授業におけるコミュニケーション活動を活発に行っていた。

本研究で行った「話者の話す内容が理解できないときに様々な CS を使用すること」は、自発的に理解できないことを解決しようとする行為である。これを「読む」活動に置き換えれば、「読んでわからない単語を辞書で調べること」と同様である。つまり、こういったコミュニケーション主体の授業によって、授業が「知識」を詰め込む場ではなく「学び方」を体験する場に変化し、自立した学習者を育成することにもつながると確信している。

8 引用文献・参考文献

8.1 引用文献

サンドラ・J. サビニョン (著), 草野バベル清子・佐藤一嘉・田中春美 (翻訳) 『コミュニケーション能力 理論と実践』(2009)法政大学出版社

COUNCIL EUROPE 『COMMON EUROPEAN FRAMEWORK OF REFERENCE FOR

LANGUAGES:LEARNING, TEACHING, ASSESSMENT』(2001)

文部科学省『学習指導要領』(2009)

8.2 参考文献

樋口忠彦, 緑川日出子, 高橋一幸(編)『すぐれた英語授業実践—よりよい授業づくりのために—』(2007) 大修館書店

国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料(高等学校 外国語)～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～』(2012)